

明治前期における一農政官僚の足跡と業績

——農業啓蒙家・後藤達三と農業結社——

友 田 清 彦*

要約：明治14年(1881)に創設された大日本農会は、日本最初の全国的な規模の農会であるが、その母体となったのは、明治8年(1875)に内務省の農政官僚らを中心に創設された開農義会、下総牧羊場関係者によって明治12年(1879)に創設された東洋農会、および明治13年(1880)に三田育種場関係者によって創設された東京談農会という三つの農業結社である。この三つの農業結社のうち、開農義会と東洋農会の両会において重要な役割を果たし、また草創期の大日本農会でも活躍した人物が、農政官僚の後藤達三である。本稿では、これまでの研究では全く取りあげられることのなかった後藤達三を対象に、その経歴と業績について検討を加え、後藤達三が明治前期における典型的な農業啓蒙家の一人であったことを明らかにした。

キーワード：後藤達三、農業啓蒙家、農業結社、開農義会、東洋農会、大日本農会

I. はじめに

開農義会は、明治8年(1875)5月、わが国最初の農業雑誌である『開農雑報』を創刊した。津田仙・学農社による『農業雑誌』創刊は、翌明治9年(1876)1月であるから、これよりも約半年ほど早い。この開農義会は、大日本農会の成立に深い関係がある。すなわち、『大日本農会報告』創刊号の「本会創立ノ概略」には、「明治八年ノ創立ニ係ル開農義会ノ会員モ亦本年(明治14年[1881])ヲ以テ東京談農会ニ合セリ」と記されており、この東京談農会は大日本農会の源流のひとつだからである。

大日本農会には、もうひとつの源流がある。内務省勸業寮に設置された下総牧羊場の職員と、同場で牧羊伝習を受けた卒業生たちによる農業結社、すなわち東洋農会である。

開農義会、東洋農会、そして草創期の大日本農会のそれぞれにおいて、きわめて重要な役割を果たした人物が、本稿で取りあげる後藤達三である。ところが、不思議なことに、その名前は『大

日本農会百年史』の「物故功労者略伝」にも載っていない。本稿では、近代移行期の典型的な農業啓蒙家のひとりとして、この後藤達三を取りあげ、その経歴と業績について検討を加える。

なお、当該期における勸農政策の展開については、とりあえず友田(2004a)を参照されたい。同稿でも明らかにしたように、明治前期における勸農政策展開に果たした農政官僚とそのネットワークの役割は、きわめて大きいにも拘わらず、従来の研究ではこうした視点はまったく看過されてきた。後藤達三は、官僚であると同時に農業啓蒙家でもあるという、この時期に独自の農政官僚を代表する人物のひとりであった¹⁾。以下本稿を通じて、この点を明らかにし、明治前期農政史再構築の一助としたい。

II. 後藤達三の経歴と英学者としての業績

明治前期に活躍した農政実務官僚については、経歴が審らかでない人物が多い。後藤達三も然りである。ほとんど唯一と言ってもよい史料は、明治25年(1892)刊行の『大日本農会報告』第131号「雑録欄」に収録されている「後藤達三君小伝」

* 東京農業大学国際食料情報学部

である。長文であるが、重要な史料なので、以下に全文を引用する（句読点は原文のまま）。

○後藤達三君小伝 君は旧幕臣にして天保十二年五月二十二日を以て江戸に生る資性温厚寡言にして敏悟なり夙に英漢の二学を修め志を教育経済に注ぐ故に君の半生の履歴を聞れば専ら此二途に経過せるものゝ如し明治元年九月二十日召出されて鎮将府附仰付られ格式禄高等追て仰付るゝ旨を以て開成所出勤致すへき旨御沙汰あり、十二月開成所教授試補申付られ。二年七月少助教に任し。三年七月大学校少助教を授けらる。四年七月十九日大学校廃せらるゝに及び文部中助教に任し翻訳専務を命せられ、八月文部少助教に任し、九月本官を免せらる、十月文部省十等出仕編輯専務申付られ。五年九月出仕を免し次で御用滞在申付られ、十月正院十等出仕申付られ。七年十一月内務省勸業寮十等出仕に補し工商務課申付られ。八年二月同寮農務課申付られ、十月同寮第三課申付らる、十一月英人ヘヌリイ、ステフェン氏の著に係る実地農業問答（Catechism of Practical Agriculture.）三冊を訳し後、勸業寮に於て之を出版し斯氏問答と題して世に行はる。九年三月総州牧羊場出張申付られ、六月総州牧羊場在勤申付らる。十年一月勸業寮廃せられ更に内務五等属に任し勸農局事務取扱申付らる、二月当分牧羊場長補心得申付られ、十二月総州牧羊場創業以来格別勉励に付手当金七拾円を給与せられ。十一年一月内務四等属に任し。十二年四月東京出張申付らる、此月牧羊場長岩山敬義氏種畜場長奥青輔氏其他有志の諸氏とともに農会を創立せんことを発企し率先發起人の列に加はりて東洋農会を組織し其組織全く成るや推されて同会録事の任に当る五部の東洋農会報告これ実に君の編輯に成れるものなり、五月牧羊開業以来教育上に関し勉励に付手当として月俸一ヶ月分を給与せられ、九月奥一等属出張中場長補心得を以て事務取扱を命せられ、十二月内務三等属に任し種畜場事務取扱兼勤申付られ香取種畜場長補奥青輔不在中該場長心得を以て事務取扱を命せらる。十三年一月獣医科総括を命せられ、五月陸

産課兼勤申付られ、七月東京出張申付らる。十四年三月東洋農会と東京談農会を合併して大日本農会を設置せんとするの議起るや君また創立委員に撰はれ其組織の諸事に与り、四月勸農局廃せられ更に農商務三等属に任し農務局事務取扱下総種畜場在勤申付らる、五月牧畜掛兼務を命せられ、八月農商務二等属に任し下総種畜場在勤申付られ、九月大日本農会農芸委員に撰任せられ獣医、牧畜の両科を担当す、十月東京出張申付られ、十一月文部省御用掛兼勤申付られ取扱判任に准し報酬として一ケ年金貳百円を給与し専門学務局勤務申付らる、十二月帰東京申付られ。十五年一月農務局報告課申付られ、同月農商務一等属に任し下等月給を下賜せられ、九月下総種畜場兼勤申付られ。十六年五月石川県へ出張申付られ、七月報告課勤務申付られ次で農書編纂掛兼勤申付らる、十二月文部省より自今一ケ年報酬として金貳百五拾円を給与せらるゝの命あり。十七年六月前田貫一氏の著に係る「農業簿記教授書三冊を」校閲す、七月農書編纂掛兼農務局事務取扱申付られ、九月畜産諮詢会事務取扱申付られ。十八年二月大日本農会常置議員に当選し、十二月上等月給を下賜せられ。十九年一月文部省御用掛兼勤を免せられ、同月農務局事務取扱申付られ編纂課勤務を命せられ、三月農務局編纂課長申付らる、此月大日本農会幹事に当選す、五月農商務属に任し判任官一等に叙し上級俸を給せられ。二十年四月大日本農会第十八回農産品評会品評委員を委嘱せられ専ら食用家禽の品評を担当す、六月重ねて大日本農会幹事並に常置議員に当撰す、此月「小学農業新書」三冊を著し其翌七月を以て出版す。二十二年三月非職を命せらる、四月大日本農会常置議員に重撰す、十一月花房義質氏其他有志の諸氏とゝもに日本園芸会發起人となりて同会の事業に幹旋し其組織成立するに及びて同会評議員に当撰す。二十三年五月日本畜産協会創立の議起るや広澤安任、与倉東隆、玉利喜造の諸氏とゝもに發起者となり、十月その総会に於て挙げられて幹事となり会計委員となる。二十四年四月又重ねて大日本農会常置議員に当撰す十二月中旬たまたま病に罹り下旬に

及ひていよいよ革まり終に本年一月一日を以て溘然不起の人となる其四日青山共葬墓地に葬る年五十二、君二子あり二男竹次郎氏家を嗣くといふ君人に接する友愛常に最切実なり故に君を知るものは親疎を問はず訃を聞きて哀悼痛惜せざるはなし（大日本農会、1892：34-35）

この記述から看取できるように、後藤達三が農政官僚として登場するのは、明治7年（1874）11月、内務省勸業寮十等出仕に補せられ、次いで翌8年（1875）2月、同寮農務課勤務を申付られてからである。さらに同年10月には、同寮第三課勤務を申付られている。第三課には「編纂、報告、製表」の各掛があった。この時までの主な任務は、幕末から明治初年、開成所時代から文部省時代にかけての、翻訳官的な仕事を踏襲したもので、農政の実務に参画するのは、明治9年（1876）3月、下総牧羊場への出張を申付られ、さらに同年6月、下総牧羊場在勤を申付られてからであろう。

もともと後藤達三は、旧幕臣の英学者であった。幕末期、諸藩に比べ、幕府には専門的な洋学知識をもった人材が豊富であった結果、彼らの多くは明治政府においても、上級あるいは中堅の技術官僚として採用され、大きな役割を果たした。後藤もそのような技術官僚の一人だったのである。

以下に、英学者としての後藤達三の主な著訳書を挙げておこう。

① 『官版 日耳曼史畧』：明治4年（1871）、大学南校刊、全10巻。少助教後藤達三訳。本書は、凡例に「原書八大英国コル子ル女師ノ撰著ニシテ原名ヒストリイヲフ、ゼルマニート云フ」（後藤訳、1871：凡例1丁）とあるように、英語で書かれたドイツ略史を翻訳したものである。叙述のスタイルは、「問日耳曼太古ノ形状如何ナル者ニシテ初メノ往来モ如何ナルヤ/答日耳曼国ノ昔ヲ尋ルニ悉ク荒漠タル森林ヲ以テ覆ヒタル国ニシテ此所ニ住ム人民多クハ雑種ニテ由テ来ル所定カナラス」（後藤訳、1871：1丁、/は改行を示す。以下同じ。）というような問答体である。

② 『訓蒙 窮理問答』：明治5年（1872）、萬巻楼刊、全6冊。後藤達三編述。本書は、「米国ペエカー氏の初等窮理書（中略、その他）一二窮理書を引き用ひ一書を訳編し題して訓蒙窮理問答と名付」（後藤編述、1872：小引2丁）けたものである。書名となっている「窮理」とは物理のことであるが、『窮理・窮理学』という用語は、帆足萬里の『窮理通』（1836）以降に、福沢諭吉の『（訓蒙）窮理図解』（1868）を初めとして、明治初期の『窮理書（物理書）』へと継承され、多くの啓蒙的な『物理書』が刊行されたが、明治10年代以降には『窮理』という言葉は物理学的な概念を表す用語としては姿を消す」（中村、2003：221）とされる²⁾。その叙述は、「弟子 御師匠様西洋の国に『子イチウレエル、フヱロソーフヒイ』とか言ふ学問かあると承りましたか何様な学問でござります/師匠 其学問は日本の言葉に言ひ替へれば窮理学と申て（以下略）」（後藤編述、1872：1丁）という師弟問答のスタイルである。

③ 『訓蒙 博物問答 一名窮理問答続編』：明治7年（1874）東生書屋蔵。後藤達三訳。国会図書館には巻之一と巻之二のみが所蔵されている。この2冊に刊記は無いが、緒言に「明治七戌ノ立冬訳者誌」とある。目次には巻之四までと附録二巻となっているが、NACSIS Webcatで検索をかけると、これを所蔵する一橋大学、筑波大学、東京学芸大学の3大学とも、巻之二までしか所蔵しておらず、巻之三以降は刊行されなかった可能性が高い。内容は、「英国教会義社ノ訓導委員ノ命ニ因テ刊行シタル『レッスン、ラン、ユニフェルス』ト題セル禽獸草木金石ノ大概ヲ童蒙ニ課スルノ書ヲ本トシテ之ヲ訳シ間々増補刪除ヲ加ヘシ博物書」（後藤訳述、1874：緒言1丁）である。叙述のスタイルは、前書と同じく、「或人問て曰自然の物の学問の中にて鳥獸草木金石のことを説く学問は何様な学問にてこれを何と申し候や/答て曰その学問の事を原語にて『子ーチユラル、ヒストリイ』と申しますこれを和解して博物学といふ」（後藤訳述、1874：1丁）という問答体である。

Ⅲ. 明治前期農政史上における後藤達三の業績

上述のように、後藤達三が農政実務に携わるのは、明治9年(1876)からであるが、後藤が勸業寮農務課勤務を申付られた明治8年(1875)には、すでに、農業関係の最初の翻訳書が刊行されている。『斯氏 農業問答』である。後藤の農政に係わる業績について、以下に、著訳書、農業結社関係という順で検討してみよう。

(1) 後藤達三の著訳書

後藤達三が翻訳・編述および校閲にかかわった農業関係の主な著書には、次のものがある。

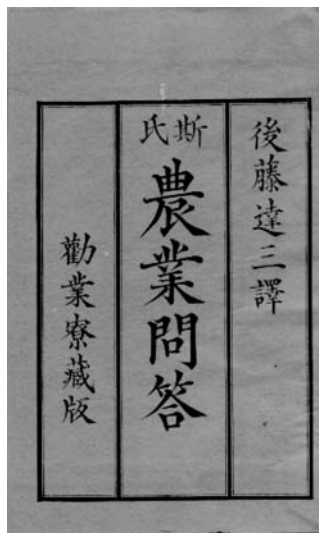


図1 後藤達三訳『斯氏 農業問答』の扉
(筆者所蔵)

① 『斯氏 農業問答』[図1]: 明治8年(1875), 勸業寮蔵版, 全3巻。後藤達三訳。本書は「『カテチスム、オフ、プラクチカル、アグリカルチュル農地農」と題して西暦紀元千八百七十年 我明治三年 英国の イェンボロウ ロンドン ヘスリスステアフェン の 依陣堡 及 倫敦 の両府に於て刊行せし 賢理斯的墳 といふ農学者の著述せる小農書」(後藤訳, 1875: 1丁) の翻訳で、原著は勸業権助岩山敬義が、岩倉使節団の理事官として米欧の農事視察・調査を行った際に、購入して持ち帰った農書の中の一冊である³⁾。これを後藤達三に翻訳させたのも岩山敬義であった。内容は、巻の一が「冬季の部」、巻

の二が「春季の部・夏季の部」、巻の三が「秋季の部・附録」で、四季の農作業について問答体で叙述している。例示すれば、「[問] 農業はいかなるしわざなりや/[答] 農業はもつはら畑に穀菜類を作る事なれとも又現に家畜を飼ひ粮なふすべをも兼ね勤むる業なり」(後藤訳, 1875: 1丁) というスタイルである。

② 『牧羊手引草(艸)』: 明治14年(1881), 勸業局蔵版, 内務三等属後藤達三編・内務省御用掛高鋭一訂。本書の「緒言」には、「明治八年, 下総国印幡埴生の両郡に跨る曠原に於て, 牧羊場を創立し, 米国人『アツプジョンズ』を聘し, 生徒五十余名を徴収し此業を伝しめたり(中略)此書は, 本場にて, 大約, 五年間経験したる実業諸般の中に就き要を摘み粹を拾ひ, 四時の飼養より通常の治療を併せて, 単簡解易きを旨とし, 此業を開設する者の階梯に供へんとするのみ」(後藤編, 1881b: 緒言 1-2) とある。

③ 『農業簿記教授書』: 明治17年(1884), 有隣堂発兌, 全3冊。後藤達三校閲, 前田貫一著述。後藤達三の著書ではなく、後藤は校閲者である。管見の限りでは、日本で最初の農業簿記の教科書であり、その後、明治20年代半ば以降になると類書が現れる。

④ 『重修 牧牛手引艸(草)』: 明治17年(1884), 農商務省農務局蔵版, 加藤懋・桂弥市編, 後藤達三校。本書も③と同様、後藤達三の著書ではなく、後藤は校閲者である。岩山敬義が「欧米二在リテ見聞スル所ト自己ノ実験トヲ参酌シテ之ヲ説示シ当時垣田権中属ヲシテ筆記セシメタ」のが『牧牛手引草』であるが、これを増補したものが本書である。

この他、明治20年(1887)に『小学農業新書』全3冊が出版されているが、所蔵先が不明のため、未見である。

(2) 後藤達三と農業結社

表1は、後藤達三が著述した論説等の一覧である。明治8・9年(1875・1876)は『開農雑報』, 明治13・14年(1880・1881)は『東洋農会四季報告』, 明治14年(1881)以降は『大日本農会報告』が主

表 1 後藤達三の雑誌掲載論説等

	タイトル	掲載雑誌名	巻号	発行年月
1	耕作の権理	開農雑報	3	明治8年(1875)7月
2	元素の説話	開農雑報	3	明治8年(1875)7月
3	家畜の論説	開農雑報	4	明治8年(1875)8月
4	支那農業の概畧	開農雑報	4	明治8年(1875)8月
5	外国にて日本の茶種を蒔付し新報論説 附茶の含畜物分析表	開農雑報	5	明治8年(1875)9月
6	人糞人尿の分析	開農雑報	5	明治8年(1875)9月
7	国へ有用物を導く利益	開農雑報	6	明治8年(1875)9月
8	道路運河の利益	開農雑報	7	明治8年(1875)10月
9	乳汁の書解并分析表	開農雑報	7	明治8年(1875)10月
10	煙草論	開農雑報	8	明治8年(1875)11月
11	日本の犁の事	開農雑報	10	明治8年(1875)12月
12	亜米利加の「ボストン」と云ふ地に住む「チャーレス、ジャクソン」と云ふ人の報告文中の糞溜を浄め且糞溜を良肥料に変する法を訳説す	開農雑報	12	明治9年(1876)1月
13	亜米利加の「ボストン」地名に住む「チャーレス、ジャクソン」氏の報告文にて糞溜を浄め且糞溜を良肥料に変する法の続き	開農雑報	13	明治9年(1876)1月
14	小麦刈割の説	開農雑報	17	明治9年(1876)3月
15	日本農業を改良する意見	開農雑報	25	刊記なし
16	畜産ノ外症ニ石炭酸ノ効用	東洋農会四季報告	1	明治13年(1880)1月
17	畜羊腹内寄生虫ノ説	東洋農会四季報告	1	明治13年(1880)1月
18	蘆粟栽植ノ要件	東洋農会四季報告	1	明治13年(1880)1月
19	泥炭ノ効用	東洋農会四季報告	2	明治13年(1880)4月
20	駆虫ノ方法	東洋農会四季報告	2	明治13年(1880)4月
21	米国加里福尼州ヨリ下総種畜場へ輸入綿羊ノ書説	東洋農会四季報告	3	明治13年(1880)7月
22	答會員加納氏ノ質疑	東洋農会四季報告	3	明治13年(1880)7月
23	右答疑(梨樹返り咲ク疑問並答弁)	東洋農会四季報告	3	明治13年(1880)7月
24	山形興城糖ノ試験	東洋農会四季報告	3	明治13年(1880)7月
25	右答(乳房焔衝並眼虫治療質問)	東洋農会四季報告	4	明治13年(1880)10月
26	下総種畜場競犁会紀事	東洋農会四季報告	5	明治14年(1881)1月
27	兵庫奥佐野牧場牛疫ノ答	大日本農会報告	1	明治14年(1881)7月
28	蜻蜒除法ノ質問並答	大日本農会報告	5	明治14年(1881)11月
29	農業ノ三綱領	大日本農会報告	9	明治15年(1882)3月
30	馬肉ノ質問並答	大日本農会報告	9	明治15年(1882)3月
31	牛馬羊豚等ニ係ル諸件質問並答	大日本農会報告	10	明治15年(1882)4月
32	犬ノ生殖器病治療法質問並答	大日本農会報告	13	明治15年(1882)7月
33	牛馬飼料質問並答	大日本農会報告	15	明治15年(1882)9月
34	牛馬価格質問並答	大日本農会報告	16	明治15年(1882)10月
35	蘇国農業会社設置紀事	大日本農会報告	18	明治15年(1882)12月
36	本邦牧畜ノ起源質問並答	大日本農会報告	21	明治16年(1883)3月
37	生蘿蔔ヲ牛馬ニ与フルノ利害質問	大日本農会報告	24	明治16年(1883)6月
38	荒蕪改良説	大日本農会報告	26	明治16年(1883)8月
39	家鶏諸件質問並答	大日本農会報告	28	明治16年(1883)10月
40	果物貯蔵法	大日本農会報告	29	明治16年(1883)11月
41	牛馬の飼料質問並答	大日本農会報告	31	明治17年(1884)1月
42	豚肉の寄生虫及び豚肉の養分質問並答	大日本農会報告	35	明治17年(1884)5月
43	牧草の名称性効質問	大日本農会報告	36	明治17年(1884)6月
44	英国の農会紀事 英国ノリレン氏著農業經濟書抄訳	大日本農会報告	39	明治17年(1884)9月
45	牛体各部の名称要点質問並答	大日本農会報告	39	明治17年(1884)9月
46	鶏卵の雌雄を鑑別する法	大日本農会報告	45	明治18年(1885)3月
47	農業教育論	大日本農会報告	47	明治18年(1885)5月
48	交趾鶏其他の件	大日本農会報告	50	明治18年(1885)8月
49	独国ホウベルスドルフ官立農学校に於て方今在職の農学博士ドクトルウエルテア氏経験の小麦試作法	大日本農会報告	58	明治19年(1886)5月
50	露国農業の奨励	大日本農会報告	61	明治19年(1886)8月
51	家禽の老壯鑑別法質問並答	大日本農会報告	62	明治19年(1886)9月
52	家鶏諸件質問並答	大日本農会報告	63	明治19年(1886)10月
53	畜牛は農業經濟の大部分を占む	大日本農会報告	64	明治19年(1886)11月
54	家鶏の加多兒治療法等質問	大日本農会報告	66	明治20年(1887)1月
55	学理を農業上に応用するの方法	大日本農会報告	69	明治20年(1887)4月

表1 続き

	タイトル	掲載雑誌名	巻号	発行年月
56	家畜飼育の原理	大日本農会報告	75	明治20年(1887)10月
57	蚕業の進歩	大日本農会報告	79	明治21年(1888)2月
58	牧馬焼印の起源質問	大日本農会報告	79	明治21年(1888)2月
59	農業建造物の話	大日本農会報告	84	明治21年(1888)7月
60	牧畜雑誌社々員諸君に一言を呈す	牧畜雑誌	1	明治21年(1888)8月
61	牛乳の説	牧畜雑誌	4	明治21年(1888)11月
62	肉牛を仕立てる方法	牧畜雑誌	8	明治22年(1889)3月
63	不妊牛の説	牧畜雑誌	12	明治22年(1889)7月
	豕の春情発動せざるの理由等質問	大日本農会報告	100	明治22年(1889)11月
64	夏季大豆糞を牛馬の飼料となすの利害質問	大日本農会報告	104	明治23年(1890)3月

(出所)：『開農雑報』、『東洋農会四季報告』、『大日本農会報告』、『牧畜雑誌』各号より、筆者作成。

な発表の舞台である。『開農雑報』は開農義会、『東洋農会四季報告』は東洋農会、『大日本農会報告』は大日本農会の機関誌である。後藤は、これら農業結社において重要な役割を果たした。

1) 開農義会と『開農雑報』

開農義会については、すでに拙稿(友田, 2004b: 16-24; 2008: 85-94)で検討したことがあるので、詳しくはこれらに譲り、以下ごく簡単に触れておこう。開農義会の機関誌『開農雑報』は、明治8年(1875)5月に創刊された。日本最初の農業雑誌である。『開農雑報』そのものは、明治11年(1878)12月の第61号で終刊になったと思われるが、『大日本農会報告』創刊号の「本会創立ノ概略」によれば、「明治八年ノ創立ニ係ル開農義会ノ会員モ亦本年(明治14年[1881])ヲ以テ東京談農会ニ合」したとされる。開農義会の中心メンバーは、創刊号の編輯人であった久我好懿、第8号から第27号にかけて巻頭に掲載された「農学のすゝめ」の執筆者であった島邨泰、当時は慶應義塾に匹敵する規模を誇った英学塾・鳴門塾を興した鳴門義民、江戸時代の農学者・佐藤信淵の諸農書の復刻や様々な農業関係の史書の編纂で知られる織田完之、そして本稿の主人公である後藤達三などである。彼らの多くは、もともとは大蔵省系統の勸農関係部局を担当した中下級官僚であった。その後、内務省勸業寮の新設にともなって、その一部は同寮に移り、一部は大蔵省に止まった。いずれにせよ、農政に関係のある官僚たちである。しかも、彼らはいずれも、幕末期に洋学や漢学・国学を学んだ知識人階層であり、学究的な官僚であっ

た。国学を代表するのが織田完之であるとするならば、鳴門義民と並んで洋学(英学)を代表するのが後藤達三である。

2) 東洋農会と『東洋農会四季報告』

開農義会の発足当初は『開農雑報』に盛んに寄稿していた後藤達三であるが、明治9年(1876)3月以降になると寄稿数が減りはじめ、同年8月頃をもって掲載されなくなっている。これは、後藤が明治「九年三月総州牧羊場出張申付られ、六月総州牧羊場在勤申付」られたためであろう。「総州牧羊場」とは、内務省勸業寮管轄の下総牧羊場である。下総牧羊場についても、すでに拙稿(友田, 2002a: 15-26; 2002b: 78-90; 2003a: 25-35; 2003b: 70-81)で詳しく検討したことがあるので、ここでは後藤達三に直接関連することのみを、ごく簡単に説明しておこう。

明治6年(1873)11月、内務省が創設され、翌明治7年(1874)1月には同省勸業寮が設置される。そこで勸農政策展開の柱の一つとされたのが、輸入防遏と輸出振興である。このうち、輸入防遏のための最重要施策として採り上げられたのは、下総牧羊場と千住製絨所であった。下総牧羊場では羊毛を生産し、千住製絨所ではその羊毛を使って毛織物を生産することにより、輸入代替として毛織物生産の振興をはかろうとする意図であった。下総牧羊場には、全国各府県に牧羊場を興していくためのモデルファームとしての役割が期待された。創業をまかされたのは、岩山敬義と御雇アメリカ人技師アップ・ジョーズである。岩山敬義は場長となり、アップ・ジョーズが牧羊場全般の

運営・技術指導の任にあたった。

さらに、モデルファームとしての機能を果たすために、明治8年(1875)8月、内務省は牧羊生徒の募集を各府県に布達し、翌明治9年(1876)4月、全国から集まった57名の生徒に対して牧羊伝習を開始した。後藤が下総牧羊場に出張を命ぜられた翌月である。やがて、明治12年(1879)4月、54名の牧羊生徒は3年間にわたる全課程を修了し、卒業証書が授与された。その卒業証書には、「勸農局雇牧羊管理」アップ・ジョーンズの名前と並んで、「生徒監督」として内務四等属後藤達三と同五等属舟木真の名前が並記されている。舟木は後藤と同じく英学者であった⁴⁾から、この二人はおそらく、アップ・ジョーンズの通訳兼助手的な役割を果たしていたのであろう。

牧羊生徒の卒業と同時に、東洋農会が結成され、明治13年(1880)1月にその機関誌として『東洋農会四季報告』が創刊された。『東洋農会四季報告』創刊号の刊行部数は200部(第2号も同じ)、編集担当の「録事」には、後藤達三が任命された。当初は舟木真も「録事」だったようだが、創刊号に掲載された「社告」に、「舟木真氏茨城県下ニ於テ荒蕪開拓ノ起業ヲ計較シ客歳(明治12年(1879))十一月辞職帰県ス(中略)右ニ付録事一名欠員」(東洋農会, 1880a: 93)とあるように、創刊時の「録事」は後藤一人であった。やがて、第3号からは龍田退蔵が「録事」に加わる。

東洋農会においては、その結成時から、会長にあたる「幹事」は岩山敬義、副会長にあたる「副幹事」は奥青輔であった。ところが、『東洋農会四季報告』第2号の「社告」には、「去月(明治13年(1880)3月?)勸農局職制ヲ改革セラレ本会幹事岩山敬義氏八陸産課長兼種畜場長副幹事奥青輔氏八本務課長心得尋ヒテ准委任ヲ命セラレ各帰東京ノ命アリ岩山氏八末夕種畜場ニ在レトモ奥氏八既ニ東京下六番町五番地ヘ移住ス」(東洋農会, 1880b: 120)との記事が見られ、さらに『東洋農会四季報告』第3号の「社告」には、「本会幹事岩山敬義氏八去月東京麹町区紀尾井町六番地ヘ移住セシガ毎月或八隔月ニ来場ノ都合ユヘ本会ノ位地従前二同

シ」(東洋農会, 1880c: 139)とあり、奥健蔵は東京へ去り、岩山敬義も下総種畜場(明治13年[1880]1月に下総牧羊場から改称)に腰をすえて仕事をできるような状況になかったことがわかる。これを傍証するのが、『東洋農会四季報告』第4号に掲載された波多野尹政「下総種畜場ノ実況」中の次の言葉である。すなわち、「當場事業ノ実況八第一号ヨリ岩山氏詳細二報道セラレシカ全氏公務ノ都合ニヨリ帰京セラレ続テ諸場諸課ノ長ヲ兼任スル所トナリ随テ事務多端ナルヲ以テ逐次報道ノ余暇ヲ得サルヲ以テ実況ノ大畧ヲ左ニ報道ス」(波多野, 1880: 15)というのである。

こうした中で、後藤達三の役割は大きくなった。明治14年(1881)1月に下総種畜場で開催された競犁会において、「右(競犁会)終リテ後(松方正義)内務卿八左ノ祝詞ヲ御演説アリ後藤内務三等属場員二代リテ答辞ヲ呈」(後藤, 1881a: 14, 傍点引用者)していることなどに、その一端が表れている。何よりも、東洋農会および『東洋農会四季報告』の存続は、筆頭録事として後藤達三の存在無しには考えられない。前に後藤の略歴として引用したように、明治「十二年四月(中略)牧羊場長岩山敬義氏種畜場長奥青輔氏其他有志の諸氏とともに農会を創立せんことを発企し率先発起人の列に加はりて東洋農会を組織し其組織全く成るや推されて同会録事の任に当る五部の東洋農会報告これ実に君の編輯に成れるものなり」(大日本農会, 1892: 35, 傍点は引用者)と評価される所以である。

3) 大日本農会と『大日本農会報告』

「(明治14年[1881])三月両会(東洋農会と東京談農会)ノ会員数十名東京府下ニ会同シ両会ヲ併セテノ農会ヲ設クヘキノ議ヲ発シ又同志ノ土此挙ヲ賛成スル者多キヲ以テ遂ニ両会員ヨリ左ノ諸氏ヲ創立委員ニ定メテ其事ヲ議セシムルニ至」(大日本農会, 1881: 1-2) った。「左ノ諸氏」とは、東洋農会から奥健蔵、東京談農会から池田謙蔵など14名で、後藤達三もそのうちのひとりである。次いで、同年「五月二十九日木挽町明治会堂ニ於テ選挙会ヲ開キ幹事以上ノ役員及ヒ議員ヲ選定」(大日本農会, 1881: 3) した。このとき後藤達三は、幹事

にも常置議員にも選ばれていない。その理由は定かでないが、前述のように奥健蔵が下総種畜場を去り、岩山敬義も東京在住で多忙となった中、後藤達三は下総種畜場の業務に専従していたためであろう。

とは言え、明治14年(1881)9月には、大日本農会の農芸委員を委嘱され、獣医科および牧畜科を担当している。また、下総種畜場は、明治18年(1885)6月に宮内省に移管され、その役割を完全に終えるが、同年2月に、後藤達三は常置議員に選ばれ、さらに明治20年(1887)4月の大日本農会第十八回農産品評会では品評委員、同年6月には幹事に新任されている。その後も、明治23年(1890)4月と翌明治24年(1891)4月に常置議員に当撰し、大日本農会の役員を歴任している。

以上のような、大日本農会の役員としての活動と同時に、表1に見られるように、後藤達三は多くの論説等を『大日本農会報告』に発表している⁵⁾。そのうちの相当部分は、大日本農会の大集会・小集会での講演の記録である。後藤は、ほぼ年1回の割合で大日本農会の大・小集会で講演を行っている。第6回小集会(明治14年[1881]11月12日)で「農業ノ三綱領」という題目で講演したのを皮切りに、第12回小集会(同15年[1882]5月13日)で「本邦農業の変遷を論ず」、第2回大集会(同16年[1883]3月17日)で「荒蕪地改良説」、第4回大集会(同18年[1885]2月21日)で「農業教育論」、第50回小集会(同19年[1886]7月10日)で「畜牛は農家経済の大部分を占む」、第57回小集会(同20年[1887]3月12日)で「学理を農業上に应用する方法」、第61回小集会(同年9月10日)で「家畜飼育の原理」、第65回小集会(同21年[1888]1月14日)で「蚕業の進歩と題せる説」、第69回小集会(同年6月9日)で「農業建造物の話」といった具合である。農業啓蒙家としての後藤達三の面目躍如とも言える活躍ぶりである。

ところで、草創期の大日本農会について、常置議員等の役員、農芸委員、集会での講演者等を概観すると、いずれも後藤達三に代表されるような、幕末期に洋学・国学・漢学等を身につけた学術的

な官僚、ないしはそれに準ずるような人物が多数を占めている。いわば、近代移行期の農業啓蒙家たちである。その意味では、明治10年代までの間は、彼ら農業啓蒙家たちの時代であったと言える。

IV. おわりに

明治23年(1890)5月11日、大日本農会は第9回定期会議を京橋木挽町厚生館で開催し、このとき駒場農学校農学科第2期生の横井時敬と大内健が幹事に新任された。また、同月13日からは大日本農会農談会が開催されているが、同会の理事(農会幹事)6名中、駒場および札幌農学校卒業の農学士は、玉利喜造、横井時敬、渡瀬寅次郎の3名、すなわち半数を占めるまでに至っていた。ちなみに、東京農林学校が文部省に移管され、帝国大学農科大学となったのは、同年6月である。

このころ、時代は、農業啓蒙家の時代から近代農学者の時代へと、大きく転換しつつあった。横井時敬の同級生、酒匂常明が日本最初の近代的稲作技術書である『改良日本米作法』を刊行したのが明治20年(1887)、そして横井時敬自身が『稲作改良法』を刊行したのは、翌明治21年(1888)であった。駒場農学校卒業生の同窓会的な色彩の強かった研農会が、札幌農学校の卒業生も加えて、農学会へと脱皮したのが明治20年(1887)11月。この農学会は、単なる学術団体としての学会という域を超え、活発な農政活動も展開し、大きな影響力を発揮した。『農学会会報』の号外として明治24年(1891)に刊行された森要太郎編『興農論策』、農学会評議員の肩書を付した高橋昌・横井時敬の合著として同じ年に刊行された『信用組合 附生産及経済組合二関スル意見』、農科大学農学会編として明治26年(1893)に刊行された『輸入棉花関税蠲免二関スル意見』などは、その一端である。

ここに、後藤達三らに代表される近代移行期の農業啓蒙家たちは、その役割を終え、駒場農学校や札幌農学校などの高等農業教育機関で御雇外国人教師について学び、また欧米に留学して近代農学を身につけた、農学者や農業技術者、農政官僚など、新進の世代に席を譲ってゆくのである。

注

- 1) 明治前期の農政官僚に関する先行研究は、管見の限りでは、ほとんど存在しない。拙稿を除けば、織田完之について三好（1995：92-105）がある程度である。織田完之については、このほかに、岸川（2003：47-65）があるが、「將門信仰と織田完之」というタイトルからもわかるように、農政官僚としての織田完之について論じたものではない。また、鳴門義民については、佐光（1990：115-131）が論じているが、これも英学史の視点からの考察で、農政官僚としての鳴門を主題とした研究ではない。なお、官僚ではなかったが、同時期に活躍した著名な農業啓蒙家として津田仙があり、津田については金（2003）、高崎（2008）などの新しい研究が生まれている。
- 2) 中村（2006：179-180）は、本書について「日本において、初めて〈熟物質説〉をはっきりと否定した文献は、今までの調査でみる限り明治5（1872）年4月の序文のある後藤達三の『訓蒙 窮理問答』である」と評価している。また、明治期における日本語の変化について論じた、亀井・大藤・山田（2007：258-259）によれば、明治期の「最初、小学校教則において、教科書としてあげられているのは、福沢諭吉の《西洋衣食住》《学問のすすめ》《西洋事情》、瓜生寅の《啓蒙智恵の環》、後藤達三の《窮理問答》、小幡篤次郎の《天変地異》、瓜生政和（梅亭金鷲）の《西洋新書》など」（傍点引用者）であるという。
- 3) 岩山敬義による『斯氏 農業問答』の「序」には、「余帰朝の折から数種の農書を齎らし還れりそが中に^{イギリス ステファン}英国 斯氏が著したる農書を最も勝れたりとす其書大小二種あり」（後藤訳、1875：序2丁）とあり、このうちの小書が『斯氏 農業問答』である。他方、大書は『斯氏農書』として邦訳され、和装本全64冊、巻之1から49までが岡田好樹の訳、内務省勸業寮から明治8年（1875）に、また巻50から64までは、明石春作の訳で、農商務省から明治15年（1882）～同17年（1884）に刊行されている。同書は、のち明治19年（1886）～同20年（1887）に、洋装全4巻の『訂正 斯氏農書』として農商務省農務局から再刊された。
- 4) 舟木真（1847-1916）は、福沢諭吉の門下生として英学を学び、その後、開拓使十五等出仕・学校教授課英学方、同十三等出仕・英学助教、札幌詰・仮学校懸を経て、内務省勸業寮に採用された。
- 5) 後藤達三は、明治21年（1888）8月から翌22年（1889）7月にかけて、『牧畜雑誌』に4本の論説を発表している。発表の舞台となった『牧畜雑誌』は、下総牧羊場時代の同僚であった桂弥市と加藤懋が牧畜雑誌社を組織し、創刊したものである。大正3年（1914）12月、第350号で廃刊となった。

引用・参考文献

- 加藤懋・桂弥市編（1884）『重修 牧牛手引艸』農務局蔵版。
- 亀井孝・大藤時彦・山田俊雄編（2007）『日本語の歴史6 新しい国語への歩み』平凡社ライブラリー、平凡社。
- 岸川雅範（2003）「將門信仰と織田完之」『国学院大学大学院紀要—文学研究科—』国学院大学大学院、第34輯、47-65。
- 金文吉（2003）『津田仙と朝鮮—朝鮮キリスト教受容と新農業政策—』世界思想社。
- 後藤達三訳（1871）『官版 日耳曼史畧』大学南校、巻一。
- 後藤達三編述（1872）『訓蒙 窮理問答』萬巻楼、第一冊。
- 後藤達三訳述（1874）『訓蒙 博物問答』東生書屋蔵、巻之一。
- 後藤達三訳（1875）『斯氏 農業問答』勸業寮蔵版、巻の一。
- 後藤達三（1881a）「下総種畜場競掣会紀事」『東洋農会四季報告』東洋農会、第5号、13-21。
- 後藤達三編（1881b）『牧羊手引草（艸）』勸農局蔵版。
- 佐光昭二（1990）「鳴門義民・その人と業績」『英学史研究』日本英学史学会、第23号、115-131。
- 大日本農会（1881）「本会創設ノ概略」『大日本農会報告』大日本農会、第1号、1-3。
- 大日本農会（1892）「後藤達三君小伝」『大日本農会報告』大日本農会、第131号、34-35。
- 大日本農会（1972）『大日本農会事蹟年表—90年の歩み』大日本農会。
- 大日本農会百年史編集委員会（1980）『大日本農会百年史』大日本農会。
- 高崎宗司（2008）『津田仙評伝』草風館。
- 東洋農会（1880a）「社告」『東洋農会四季報告』東洋農会、第1号、93。
- 東洋農会（1880b）「社告」『東洋農会四季報告』東洋農会、第2号、119-122。
- 東洋農会（1880c）「社告」『東洋農会四季報告』東洋農会、第3号、136-140。
- 友田清彦（2002a）「農政実務官僚岩山敬義と下総牧羊場（1）」『農村研究』東京農業大学農業経済学会、第94号、15-26。

- 友田清彦 (2002b) 「農政実務官僚岩山敬義と下総牧羊場 (2)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第95号, 78-90。
- 友田清彦 (2003a) 「下総牧羊場の系譜 (1) —牧羊生徒と牧羊場職員たち—」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第96号, 25-35。
- 友田清彦 (2003b) 「下総牧羊場の系譜 (2) —牧羊生徒と牧羊場職員たち—」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第97号, 70-81。
- 友田清彦 (2004a) 「明治前期における内務省勤農政策の展開に関する実証的研究—西洋の衝撃と近代農政草創期の担い手ネットワークを中心に—」(博士論文, 東京農業大学論博第770号)。
- 友田清彦 (2004b) 「開農義会と『開農雑報』—明治初期の農業結社とその人々—」『農業経済研究』日本農業経済学会, 第76巻第1号, 16-24。
- 友田清彦 (2006a) 「明治初期の農業結社と大日本農会の創設 (1) —東洋農会と東京談農会—」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第102号, 1-14。
- 友田清彦 (2006b) 「明治初期の農業結社と大日本農会の創設 (2) —東洋農会と東京談農会—」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第103号, 25-44。
- 友田清彦 (2008) 「資料 『開農雑報』総目次 (第1号~第61号)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第107号, 85-94。
- 中村邦光 (2003) 「科学史入門: 日本における『物理』という術語の形成過程」『科学史研究』日本科学史学会, 第42巻 (No. 228), 218-222。
- 中村邦光 (2006) 「日本における〈熱運動説〉の受容過程」『科学史研究』日本科学史学会, 第45巻 (No. 239), 178-182。
- 波多野尹政 (1880) 「下総種畜場ノ実況」『東洋農会四季報告』東洋農会, 第4号, 15-21。
- 三好信浩 (1995) 『近代日本産業啓蒙家の研究—日本産業啓蒙史下巻—』風間書房。

(受付 2008 年 11 月 12 日)
(受理 2009 年 1 月 9 日)

A Great Agricultural Bureaucrat's Achievements and Accomplishments in the 1st half of the Meiji Era (1868-1012) : Tatsuzo Gotoh, Advocate of Agricultural Enlightenment and His Agricultural Association

Kiyohiko TOMODA (Tokyo University of Agriculture)

Dai-Nippon Nohkai, established in 1881, is the agricultural organization formed for the first time in Japan on a nationwide scale, and its parent bodies are the following three : (1) Kainoh-gikai founded by the officials who were mainly agricultural bureaucrats of Naimu-sho (the Ministry of Home Affairs) as its pivotal staff. (2) Toyo Nohkai founded by sheep-breeding experts who resided in Shimohsa in 1879. (3) Tokyo Dannoh-kai that was started by the people of Mita Seed-Raising Farm. At this stage, the distinguished name of Tatsuzo Gotoh who was agricultural-policy bureaucrat, must specially be mentioned Gotoh played very important roles in Kaino-gikai and Toyo Nohkai, referred to above, as two of the three agricultural associations. He also pursued active endeavors in Dai-Nihon Nohkai in its early period. Dealing with, In this paper, I focus on Tatsuzo Gotoh who has never been taken up in studies to now, and conduct an objective investigation into his career and accomplishments. Thus it is clarified that Tatsuzo Gotoh was one of the typical advocates of agricultural enlightenment.

Key words : Tatsuzo Gotoh, advocates of agricultural enlightenment, agricultural association, Kaino-gikai, Toyo Nohkai, Dai-Nippon Nohkai